

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 141 号

平成26年1月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三「はまなすのこみち—私の歩んだ道—」より (3)

自然科学の進歩と倫理性

まえがき

一自然科学学徒の私が自分の貧弱な哲学や人生観を披露してみても、何一つ先人のそれに付け加えることはできないのは明らかである。若し少しでも参考になるものがあるとすれば私の環境に於て、かく考えかく歩み、かく学んだという体験を語ることにあると思う。それはあたかも自然科学を学ぶ場合、多くの学説や仮説を読むよりも一つの実験記録をよく読む方がはるかに真実に近づく手段であることが多いのと同様であろう。

そういう意味で私事を語ることは本意ではないが、以下自分の心境と体験を中心に主題を取り扱ってみることにする。

青年時代の第一の間

「お前の一生を何のために捧げんとするか」

「何のためにお前は学ばんとするか」

という間は人生に目覚めた頃どこからともなく迫ってくる。この間は極めて原始的なものであるが最も根本的な人間に対する問である。これに対して哲学者も宗教家も完全な回答は困難であろう。この問が何人にも青年時代に一度は遭遇するところのものである。私もこれを高校時代に経験した。之に対する回答は到底青年時代には与えられない。しかしこの問いに対しどんな態度を持ち、如何に処置するかによってその人の一生に大きな影響を、否根本的な支配力を及ぼすことになる。ある者はその答を得んとして忍耐強く対決してゆく、ある者はそんなことを考えても無駄であるとして之を簡単に放棄する。或は又自己の小さな理解の上に立って一つのイズムに走り、人生を割り切らんとする。前者の場合は求道の路であるが、その結果は必ずしも一様ではない。後の二者の場合は、とにかく無節操に陥るか或は人間の自由な精神と尊厳性に対する欠乏に陥る危険がある。青年に於けるこの第一の問いに対する態度と方向づけがその一生を支配する舵の役のように思う。…

私の場合

私の場合第一の問いに対する答えは勿論未解決のままではあったが、この衝動が私をして折に触れて先哲の書を読ませ、又当時の思想家や宗教家の話に耳を傾けさせた。大学に進むに至って私は偶然にも基督教主義の東大学生だけのドミトリーの同志会（これは20人位の家庭的な自治寮で現在までに58年の歴史を有する。本郷西片町10にある。）に入った。ここで実生活の上でキリスト教に接し、又聖書や先輩の証を通じてキリストの一生を学ぶ機会を得て自分の心に大きな希望が与えられた。キリストの一生とその比類ない人間像が示されてこれこそが自分が従うべき道であることを悟らされ、最早それ以外の道必要ないように思われた。高校のとき孤灯の下で「真実な人間の道が何であるかを何時の日か分かる様に、そしてその道はいかにけわしくとも吾行かん。」と捧ぐ可き相手を知らなかった祈りではあったが、その祈りが今や答えられた様に思われた。道は示されたとはいえ、疑問懷疑は解消したわけではない。その間内村鑑三の門に入し、教会の集会にも出て道を求めたが前途尚通しの感が深かった。

東大聖書研究会の思い出

頭で道を求め心でその方向を感得しても人生に於ける経験と試練の少ない青年には道を体得することは困難である。私も幾度か道を見失う危険にさらされた。それは丁度実験の伴なわない自然科学の知識に等しく、実になっていない。東大に於て内村先生門下の教職員学生の有志が集って聖書研究会を始めたのも私が丁度卒業したばかりの年(大正14年)であったろう。この集会は自然に矢内原先生を中心とした10人か15人くらいの小集会であった。私はその後数年外遊などの為中絶し極めて不忠実な会員であったが、夜遅くまであの山上会議所の1室で聖書に就いて又吾々若い者の疑問を取り上げて語り合ったひとは貴重な思い出である。当時尚人生を科学的に合理化して理解せんとする心が、聖書の教えとかく反撥する事を、たしなめてもらったのも今は感謝の思い出となっている。青年時代のかかる交わりと祈りの集いが理論や哲学を超えて深く心に訴え、それが後になっても疑いの心の起こるとき又呼び返してくれる支柱になっている。

学問に対する興味

大学の卒業論文をものする頃、遅ればせながら私は学問に対する興味と熱意を初めて呼び覚まされた。それまでは学問を学ぶ事は人生の手段としてしか、半ば強制された義務として受けていたが、この頃から自然科学は自然の实在に対する驚異として学ぶ対象となった。この科学に対する熱心な態度の教訓は一つに私の師事した朝比奈先生の科学者としての人格から学ぶところが多かった。与えられた研究に夢中になって数年を過ごしたが、自分は人としての進む可き道をおぼろげながら示されてから人生に不安や焦燥もなくジグザグながら人生にこもごも来る不幸や戦いによって訓練されつつ物ごとに対する判断、岐路に立った場合の決断も左程の不安と躊躇もなく過ぎて来た。顧みれば其の道は平坦であり平穩に打ち過ぎた半生である。それは恵まれたという言葉よりも意気地のない真剣さの足りない半生とも言い得る。私は密かにそれを反省し、いまだ自分に残された使命を果たしたいと希う。

自然科学研究のあり方

大学時代に自然科学を学ぶにあたって教科書を読み、或は講壇から先生の体験談を聞くばかりでなく、自らの実験を通して自然現象を支配する原理とその構造を体得することの重要さは今更申すまでもない。自分は研究者として、特別な抱負も自信もなかったし、一生研究者になろうとも思っていなかったが、大学の最終学年にA教授について与えられたテーマと取り組んで初めて自然科学、ひいては学問に対する強い愛敬が目覚めさせられた。自分の能力が問題でなく、小さいながら研究者として一生を終ってもよいという決意が湧いて来た。私は思う、就業時代に学問に対する敬愛と実在に対する畏敬の目を開いてもらう事は如何に大切であるか強調し過ぎることはない。大学教育の使命の第一義はここにあると言ってもよい。研究者、教育者を志す者ばかりでない、実務に就かんとする者も、大学の門を出るときこの一事を体得してゆくとならば大きな差になるであろう。

留意すべき 2, 3 の問題

ここに科学を学びこれに対処する場合注意すべき 2, 3 の問題がある。科学は自然界ならびに実在を規律している原理ないし現象を客観的に学ぶことにある。そこには人間の自我や恣意の介入は許されない。科学を学ぶ事によって我々は厳然とした自然の法則と深遠な実在の前に襟を正しくする事を学び、正しい批判力を養う。しかし科学自身の中に科学の方向を規正したり、価値の判断を生み出すものを期待する事は出来ない。科学に正しい価値と方向を与えるものは人間の側にある。科学の進歩によって事物の未知の世界が切り開かれ不可能であったことが可能になり、社会も又大きくその影響を受けている現状に於て我々は科学を過信し勝ちになる。…

人間は精神の自由を持った人格者であり、之を自然現象によって支配されている肉体を持つものとして把握するとしても、之を人間の不完全な理知と科学的知識を以て割り切ることは科学的でなく、とかく科学の入門の者や科学を机上で抽象的に論じこれと人生観を直ちに結びつけんとする人々が往々にして犯している過ちである。青年時代の誤った教育と思想の混乱も原因はこの辺にあるかもしれぬ。

科学の進歩と倫理性

自然科学の進歩を促す推進力を大別すれば二つに分けられよう。一つは自然に対する畏敬というか、実在に対する探求の心、或は単なる興味からも科学は推進される。美しい花の色は何がそうさせているかを吾々は知りたい。科学者はこれを取ってその成分をあらゆる知識を動員して、これはアントチアンの色素を持ち、それはフラボンを含み、色の変化は金属の媒介によって起こると、その間の関係を明らかにする。科学者自身は別にそれが何の役に立つかは意としない。ヒマラヤあるいはアンデス山脈の高峰に登山家はあらゆる犠牲を顧みず之を決行する。その目的はと問えば「Because it is there」と答えるであろう。その言葉は余韻があり意味深長であるが何か物足りなさを感じず。「学問は学問の故に尊し」という言葉は人間の勝手な恣意によって歪められてはならぬという尊厳性の為に正しい。然し科学の知識の蓄積とその成果はそれ自身価値あるものではなく、それが至高の目的に奉仕してその所を得るものであることは明らかである。何となれば「偉大な発見も科学的真理もそれは地獄にも天国にも通用する」ものであるからである。

科学の推進力をなすもう一つの力

科学の推進力をなすもう一つの大きな力は社会の必然的な要求と特定の目的から来るものである。戦争目的が科学の異常な進歩をもたらす事は措くとして社会生活を豊富にし人間の生活を向上させよとの願望は科学とその技術に長足の進歩をもたらした。不幸な病気を克服してやろうとの願いが医薬の進歩のみならず生体に対する貴重な知識を供給してくれた。必要と願望が科学と技術の進歩を促す事は現代文明の特長という事ができる。…

今や人間の創りあげて来た文化と科学を、今こそ之を正しく制御しなければならぬ段階に来た事は識者の認めるところであろう。科学に正しい目的を与え、文化に正しい方向を与え得るものは自然競争や適者生存の原理でもなく、唯人間性の中に期待し得る智慧とその実行である。アルベルト・シュバイツァーの言葉を借りるならば真の文化は二つの要素を持つ。一つは自然力を合理的に制御するすなわち科学的知恵と、他の一つは人間自我の理性的制御にあると。そして後者こそは前者に対して優位でなければならぬ。何となれば、盲目的な科学の進歩と自然力を人間文化の真の誤らない進歩に導くものは後者の力であるからであると。

人間至高の倫理はどこからくるか

この科学の成果と文化を本来の目的すなわち人類の真の福祉の為に方向づける者は自動的科学的進歩でなく、之を生み、之を支配し得る人間性、人間性の中にある高い倫理でなければなるまい。人間のあるがままの欲求から、必然的に来る無軌道におちいり勝ちな文化に、正しい方向を与え、価値の転換を迫るものは最初にあげた最もプリミティブな第1の問い「人は何の為に生き何の為に一生を捧げるべきか」の答えからのみ生まれるであろう。

人間至高の倫理はどこから来るか。又之を身を以って実行する力がいかにして与えられるかはキリスト者と宗教家は答えてくれる筈である。答えられるだけでは忠実でない。人類の運命と同胞の将来に関心を持つならば一人でも多く之を実行に移さねばならぬ。シュワイツァー博士がその模範を示したように。

知者は教える。「正しい道を保ち歩む者はたとえいかに遅く歩むとも、道から離れて、速やかに走る者よりも遥かに多く前進するであろう」と。

科学が正しくその所を得ること

吾らは科学の進歩の遅きを憂えない。科学が正しくその所を得る事を欲する。故に科学の進歩の如何は、科学者だけの誇りでもなく、責任でもない。之を利用し職業に従事している者にも等しく責任があり、協同の榮譽が担われねばならぬ。医学も薬学も聖別された仁術の為に捧げられねばならぬ。之を利用する医師も看護婦も生産する薬業者も共同の責任と榮譽を持ち、社会一般も又共同の責任を以って科学の恩恵に対処せねばならない。

あるがままの人間の恣意は地獄に通ずるものである以上人間の人間の生んだ科学も文化もそのままでは滅びの運命を辿るであろう。その徴はすでにこの眼で見ることができる。之を滅びから戻すことは所詮不可能であろう。然し凡てを支配する神を信ずる者は如何にそれが悲観的に見えても彼の至上命令に従うのみである。

(東大聖書研究会編『信仰と生活の中から』より)